大学生における「ほめ」の友人関係維持機能

— 「ほめ」の根拠の有無と関係の親密度の違いからの検討—

野崎 秀正

(宮崎公立大学)

キーワード: 大学生、ほめ、友人関係維持

The effects of praise on maintaining friendships in university students.

Hidemasa NOSAKI

(Miyazaki Municipal University)

Key Words: university students, praise, maintaining friendships

目 的

「ほめ」は、対人関係を良好に維持するための手段として用いられることがある。これは、「ほめ」が、一般的に、ほめられた側(受け手)のポジティブな反応、特に、ほめた側(ほめ手)に対するポジティブな印象評定を受け手にもたらす行為として認識されるためである。

しかし、「ほめ」が行われる条件により、必ずしも「ほめ」が受け手のポジティブな反応に結びつかない場合もある(高崎, 2011)。特に、ほめ手が「ほめ」を印象操作の方略として利用していると受け手に認知された場合、むしろ、ほめ手に対してネガティブな印象評定を行うことも考えられる。

本研究では、「ほめ」の友人関係維持機能として、受け手が抱くほめ手への印象評定を扱い、これに異なる影響を及ぼす条件として、「ほめ」状況におけるほめの根拠の有無と2者の親密度の2要因を特定し、その影響を検討することを目的とする。親密度の高い相手よりも低い相手の場合、また、ほめの根拠が明確であるときよりも不明確である場合に、「ほめ」の受け手は「ほめ」をほめ手による印象操作の手段として認識しやすいことが考えられるため、ほめ手に対してよりネガティブな印象を抱くことが予想される。

方 法

参加者 大学生 157 名を対象に実施した。

調査手続きと質問紙の構成

大学の日常場面で同じ講義を受講している同性の友人から自分の容姿をほめられるという状況のシナリオ(4パターン)を提示し、そうした場面を想像してもらった後に、自分をほめた相手に対する印象について尋ねる質問紙への回答を求めた。(1)「ほめ」の根拠及び親密度の操作: ①『「ほめ」の根拠の有無』は、「昨日買ったばかりの服を着ている」か「いつもと同じ服を着ている」かの違いにより操作した。また、②「親密度」は、自分をほめた人物が「親しい友人」か「挨拶する程度の友人」かの違いにより操作した。2(「ほめ」の根拠; あり・なし) × 2(親密度; 高・低)の組み合わせにより合計 4 パターンの異なるシナリオによる質問紙を作成した。(2)「ほめ」の受け手のほめ手に対する印象評定: 対人認知構造を測定する林(1978)の特性形容詞尺度(SD法による7段階評定の尺度、20項目)を用いた。

結 果

特性形容詞尺度の20項目について、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、3項目については、単独項目での因子構成となったため、この3項目を除外した17項目について、再度同様の因子分析を行った。その結果、3因子が抽出された。この3因子について、先行研究(林, 1978)に倣い、「親しみやすさ」(「感じのわるい—感じのよい」など)、「活動性」(「重厚な—軽薄な」など)、「社会的望ましさ」(「気長な—短気な」など)とそれぞれ命名した。

次に、3つの因子のそれぞれについて下位尺度得点を算出

し、根拠の有無と2者の親密度の違いによる「ほめ」の受け手のほめ手に対する印象評定の差を検討するために、2(「ほめ」の根拠; あり・なし) × 2(親密度; 高・低)の2要因分散分析を行った。

その結果、まず、「親しみやすさ」については、根拠の有無の主効果が有意であり、根拠がないときよりもあったときの方がほめてくれた相手に対してより親しみをもちやすいことが明らかになった($F(1, 153)=6.24, p<.05, \eta^2=.039$)。次に、「活動性」については、有意な交互作用がみられた($F(1, 153)=4.54, p<.05, \eta^2=.029$) (Figure)。下位検定の結果、根拠なし群において有意差がみられ、親密度が高い相手よりも親密度が低い相手からほめられた場合において、ほめてくれた相手に対してより活動的であると評価することが明らかになった。なお、「社会的望ましさ」については、有意差はみられなかった。

Figure. 「ほめ」条件別のほめ手に対する印象評定 (活動性)

考 察

「親しみやすさ」の結果については、ほめの根拠がない場合に、親密度に関係なく受け手がほめ手の何らかの印象操作の意図を推測することで、相手に対して親しみやすさを感じにくくなるためであることが考えられる。一方、「活動性」の結果については、ほめの根拠がなく、しかも親密度が低いにもかかわらず、「ほめ」という親密なコミュニケーションを図る相手に対して社会性の高さを認識するためであることが考えられるが、一方で、そうした相手に対しては「軽薄さ」、「軽率さ」などのネガティブな印象を形成するともいえる。

引用文献

林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 25, 233-247.
高崎文子 2011 「ほめ」に効能がない状況の要因分析—ほめられる側に焦点を当てた分析から— ソーシャルモチベーション研究, 6, 40-53.